



日本ルイ・アームストロング協会 ワンダフルワールド通信 No.92

日本ルイ・アームストロング協会（ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション=WJF）2017年1月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 TEL:047-351-4464 FAX:047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp
ホームページ <http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf/>
発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫

クラシックの殿堂、紀尾井ホールで再び「ジャズの源流をたどる旅」

「ビッグバンドの時代～スウィングしなけりゃ意味ないね～」

特別編成の外山喜雄とセインツ&守屋純子率いる紀尾井ジャズオーケストラ

前年末に続き、昨年末の12月23日（祝）、東京・千代田区の紀尾井ホールでジャズの源流をたどる旅Vol.2として外山喜雄とデキシーセインツらを迎えた公演「ビッグバンドの時代～スウィングしなけりゃ意味ないね～」が今回も800席、ホール満員のお客さまを迎えて開催された。ジャズコンサートとはいえ、観客の6～7割は、同ホールおなじみのクラシックファンだったとかで、前売り券は発売早々に即完売、期待の大きさが知れたが、ジャズの魅力を存分に発揮した熱演が続き、期待にたがわず聴衆を魅了した。

主催：公益法人 新日鉄住友文化財団、協賛：新日鉄住金ソリューションズ株式会社



(写真上) 外山喜雄とデキシーセインツの特別編成ビッグバンド、(同下) 守屋純子と紀尾井ジャズオーケストラ

1920年代後半1930年代、シカゴにわたったビッグバンド全盛時代にスポット
NYカーネギーホールでのグッドマンの譜面も手に入り熱演再現！
 禁酒法時代に大流行した圧巻のエンターテインメント、チャールズダンスも蘇る

**バンドに欠かせないスウィング感はずッチモの影響
 「レッツ・ダンス」「その手はないよ」のメドレーで開演**

午後4時開演。今回も超ベテラン、露木茂さん(元フジテレビ・アナウンサー)の司会で幕を開けた。大好評を博した前回「ニューオリンズ・ジャズ素晴らしきサッチモの世界」に続く「ジャズ源流の旅」第2弾。“日本のサッチモ”外山喜雄さんがまず招かれてステージに上がり、お二方でジャズ談義(写真上)。ジャズがシカゴ、NYにわたってビッグバンドが生まれ、ダンスと結びついた1920年代後半から1940年代、グレン・ミラー、ベニー・グッドマン、デューク・エリントン、カント・ベーシーらのビッグバンド全盛時代とビッグバンドの歴史にスポットがあてられる。「アメリカはなんでも大きいものが好きなんですねえ。ジャズも、車も、トランプさんみたいに人間も…」と露木さん。「そのビッグバンドにはスウィング感が欠かせません。ルイ・アームストロングの影響が強いです」と外山さん。ジャズ評論家、瀬川昌久さんも昨年に続き登場、サッチモがジャズに及ぼした大きな影響を強調された。



冒頭に動画、若き日のサッチモのダイナ(1934年)、エリントン(チェック&ダブルチェック1930年)、ベイシー(1940年頃)、グッドマン(ハリウッドホテル1937年)、グレン・ミラー(銀嶺セレナーデ1941)の映像が大型スクリーンに映し出される。

演奏はまず1938年、スウィング時代を象徴する出来事となったNYのクラシック

の殿堂、カーネギーホール・コンサートでもおなじみのベニー・グッドマンのテーマソング「レッツ・ダンス」と「その手

はないよ」のメドレーで始まった。

そういえばここ日本のクラシックの殿堂、紀尾井ホールは新日鉄住友文化財団が事業運営に当たっている。「どちらも“鉄”ですね」と露木さん。「はい、紀尾井ホールは、あのカーネギーホールにヒントを得て作られ、また、1938年のベニー・グッドマン・コンサートに影響を受け、自主ジャズ企画を始められたわけで、今回なんとか当時のグッドマン楽団の楽譜は残っていないだろうかと探したら、これが見つかったんです！今日はまず当時の貴重な編曲の再現で、幕を開けさせていただきます」と外山さん。

**大編成のバンド演奏で往年の名曲が次々と登場
 異色のダンサー、南山光徳さんと新井雅さん熱演**

外山さんのビッグバンドはセインツのレギュラー、外山喜雄(tp,vo)・恵子(p)、広津誠(cl,ts)、粉川忠憲(tb)、藤崎羊一(b,tuba)、サバオ渡辺((ds)、それにゲストの阿部寛(g,bj)、大森明(as,cl)、渡邊恭一(ts,as,cl)、鈴木まさあき(tp)、松本耕司(tb)の皆さんに2部に出演の、守屋純子バンドから木幡光那、岡崎好朗(tp)、佐藤春樹(tb)、近藤和彦(as)、アンディー・ウルフ(bs)の5人が加わった大編成。

グッドマン・メドレーに次いで演奏曲目は、「ワン・オクロック・ジャンプ」(カント・ベイシー)、「セ・シ・ボン」(ルイ・アームストロング)、「シュガー・フット・ストンプ」(1925年のフレッチャー・ヘンダーソン)、「イエス・サー・ザッツ・マイ・ベイビー」、「イン・ザ・ムード」(グレン・ミラー)、「スウィングしなけりゃ意味ないね」(デューク・エリントン)。

「イエス・サー・ザッツ・マイ・ベイビー」では、バイオリンの関泰子さんが加わって、ダンスペアー南山光徳さんと新井雅さんによる素晴らしいチャールズダンスが披露された(写真左)。まさに1



920年代、禁酒法の時代に大流行した圧巻のエンターテインメントが蘇る。続く、グレン・ミラーの名曲「イン・ザ・ムー



ド」では、1930年代一世を風靡した華麗なスウィング・ダンス。そして一部の締めはコンサートのテーマともなった名曲「スウィングしなけりや意味ないね」。関泰子さんのバイオリン・カデンツァから始まるエリントン・サウンドに会場が酔いしれた。1930年公開のポール・ホワイトマン楽団主演の映画「キング・オブ・ジャズ」の抜粋も上映され、ジャズの歴史とビッグバンド時代を楽しくまたわかりやすく解説した、ジャズ源流への旅 Vol 2の第1部だった。

佐藤修さん厳選のジャズ・コレクションも展示

午後5時過ぎ、20分間の休憩。2、3階のロビーには、日本ジャズ音楽協会理事長、佐藤修さん(元ポニーキャニオン会長、元日本レコード協会会長)の膨大なジャズ・コレクションの中から厳選されてきたこの日のテーマにふさわしいLPレコード・ジャケット、映画プログラム、ポスター、書籍などが展示され、ファンの注目を集めていた(写真上)。

クラシック「花のワルツ」をジャズに変えての名演「シング・シング・シング」で全員によるフィナーレ

第2部は外山さんのバンドに代わって守屋純子さん率いる紀尾井ジャズオーケストラ登場。守屋さんは、早稲田大学「ハイ・ソサエティ・オーケストラ」で活躍。卒業後 NY マンハッタン音楽院に学び、修士課程を修了し、ピアノの演奏、ジャズの作・編曲、ビッグバンドのリーダーとして大活躍、尚美学園大学、昭和音楽大学で後輩の指導にもあたっているという。

この日は、国内外で活躍する第一線のアーティストで構成された特別編成のビッグバンドを率いてデューク・エリントンの音楽の世界をテーマに熱演。プログラムに一文を寄

せている森田一義(タモリ)さんによると、外山夫妻所属の「早稲田大学ニューオールリズジャズクラブ」と「ハイ・ソサエティ」、タモリさんの「モダンジャズ研究会レギュラーグループ」の3バンドは、春夏の休みに北海道から九州まで全国を回って、各地の市民ホールをどこも満杯にしたという。司会の露木さんも早稲田の学生時代、これらのバンドのステージでよく司会をされていた。

さて紀尾井バンドのメンバーは、守屋純子(p=写真下の

左)、佐久間勲、木幡光邦、奥村晶、岡崎好朗(tp)、佐野聡、佐藤春樹、東條あずさ(tb)、山城純子(btb)、近藤和彦、緑川英徳(as)、岡崎正典、吉本章



紘(ts)、アンディー・ウルフ(bs)、納浩一(b)、広瀬潤次(ds)、岡部洋一(perc)の17人編成。演奏曲目は「A列車で行こう」(デューク・エリントン)、チャイコフスキーの「くるみ割り人形組曲」より序曲「花のワルツ」、「デュークに捧ぐ」(守屋純子オリジナル、初演)、ソロで「プレリュード・トゥー・ア・キス」、そして「キャラバン」(デューク・エリントン)。

この「花のワルツ」は、この公演に先立つ11月30日、紀尾井小ホールで開催された「外山喜雄&守屋純子によるジャズ講座」(司会:山口真一・新日鉄住友文化財団制作部長)で、守屋さんによってデューク・エリントンらによる著名な編曲が次々と披露されたこともある。クリスマス、そし





いを一言で言い表した末、自らは混沌たる(?)デュークにこだわり、さらに新しいジャズを切り拓こうとしているように思いました。かっこよく迫力がありました。ということで、このコンサート自体がジャズの源流を遡る流れとずっと流れを下る二つの流れからなっており、その構成も見事なものでした」

でクラシックの殿堂での公演にふさわしい曲目となった。「キャラバン」が終わると、外山夫妻、セインツ、ゲストミュージシャン、ダンサーら全員がステージに登場し、壮大なフィナーレ「シング・シング・シング」が聴衆を飲み込んだ(前ページ写真下)。終わって全員が再びステージに戻って記念撮影となりました(写真上)。(小泉良夫)

次はカウント・ベイシーをテーマに開催予定

コンサート終了後、興奮さめやらぬ楽屋で出演者およびスタッフの打ち上げ。紀尾井ホールの中野真一さんにより「お疲れさまでした！成功裡に終了しました！」と乾杯の発声。その後、中野さんに今回のコンサートと今後についてインタビューをお願いしました。「今回のジャズコンサート、800席のチケットは完売でした。約7割がクラシックファンのお客様でしたが、コンサートを大変喜んで頂けました。来年度もカウント・ベイシーをテーマに開催予定です」とのコメントしていただいた。(山口義憲記)

寺島祐二さんから感動のコメント

山口義憲さんの友人、寺島祐二さんからコメントをいただきました。

「一言でいうと予想を超える楽しさを味わいました。外山さんの演奏を聞くのは実質的には今回初めてだったと思います。黒人ジャズのスイング感を示した最初の外山さんのサッチモ風スキットで鳥肌がたちました。100年近いジャズの歴史を超えてサッチモを通じな源流を極めようという外山さんが輝いている印象を持ちました。これに対して守屋さんはカウント・ベイシーとデューク・エリントンの違



(写真上)外山夫妻。昨年は「夫婦でジャズ50年」やら、この紀尾井コンサートやら本当にご苦労様！(同下)乾杯！外山さんを囲んで守屋純子さん(左)と山口真一さん(右)

<お礼の言葉> 昨年に続き、今年もクラシックの殿堂紀尾井ホール初の主催ジャズ企画となった「ジャズ源流への旅」第2弾を担当させていただきました。歴史は巡ってスウィング全盛時代。ビッグバンドの名曲と歴史、そしてデューク・エリントンと若い世代の新しい感覚のビッグバンドがテーマとなりました。第2部の守屋純子さん指揮の紀尾井ジャズオーケストラには、守屋さん始め、モダンジャズ界ビッグバンド界で活躍される皆さんが参加。出演総勢33名、第一部の私達のスウィング・ビッグバンドにもお手伝いをお願いした皆さんから大変楽しかったというご感想をいただきました。ロビーでは今年も、佐藤修さんの貴重なジャズ資料の展示も開催して頂きお客様からも素晴らしいコンサートだったというご感想をいただきました。このような企画を昨年に続き担当させて頂いた紀尾井ホールのご担当部長山口真一さん(現総務部長)、小林昌幸マネージャー、公益財団法人 新日鉄住金文化財団常務理事町田龍一様他の皆様に心からお礼を申し上げます。

22年前日本ルイ・アームストロング協会が発足し、次のような夢を抱いたのを思い出します。『サッチモの精神のもとで、ニューオリンズ・ジャズからスウィングジャズそしてモダンジャズまで、プロもアマチュアも、全てのジャズ・ミュージシャン達が集う』。昨年の紀尾井ホールには早稲田大学ニューオリンズジャズクラブが参加、そして今年はモダンジャズ界の皆さん。昨年今年と司会をご担当下さった露木茂さん、ゲストの瀬川昌久先生、長年演奏を共にしているデキシシーセントズのメンバー、粉川忠範、広津誠、藤崎羊一、サバオ渡辺各氏、サッチモ祭を続け、日本ルイ・アームストロング協会の例会でジャズの歴史に取り組んできた、そんな私達を、応援し見守って下さったWJF会員、ジャズファン、ご支援くださっている皆様
——外山喜雄

紀尾井クリスマスコンサートのお客様から「独楽吟」16首

この紀尾井ホールでの公演当日、会場で耳を傾けていらした阿部毅一郎さんから紀尾井ホール、山口真一さんのもとに下記の素晴らしい「独楽吟」が寄せられてきました。

たのしみは 今日4時から クリスマス ジャズコンサートに 妻と行くとき・・・たのしみは 二階一列 中央の 一等席で
ジャズを聴くとき・・・たのしみは 先日講義をした二人 ビッグバンドを 率いて出るとき・・・たのしみは スウィングしなけりや
意味ないね ジャズの源流 たどって行くとき・・・たのしみは ベニー・グッドマン メドレーは なじみの曲の パレードのとき・・・
たのしみは 学生時代の DP の 懐かしい曲に 夢心地のとき・・・たのしみは 2部はデューク エリントン こっちもなじみの 曲並ぶとき・・・
たのしみは 「A列車で行こう」は 地下鉄で ジャズの聖地の ハーレムへ行くとき・・・
たのしみは 映像フルに 活用し ジャズの歴史 回顧するとき・・・たのしみは シカゴ時代を 中心に ビッグバンドの ジャズを聴くとき・・・
たのしみは ジャズは乗らなきゃ 意味ないね なじみの曲に 乗りまくるとき・・・たのしみは プロダンサーが チャールストン 舞台狭しと 繰り広ぐとき・・・
たのしみは デュークへ捧ぐは 守屋(純子)作 自ら初演の 指揮を執るとき・・・
たのしみは 大音量の トロンボーン 初めて生で 聴く気するとき・・・たのしみは 金管楽器が それぞれの 個性豊かに 絶叫するとき・・・
たのしみは 踊りだしたくなる気分 抑えて体を 揺すって聴くとき

石井一・佐藤修両氏による 日本ジャズ音楽協会が発足

1953年JATPの来日を実現させ、日本のジャズブームの火付け役となった当時の日本マーキュリー(株)社長、石井廣治氏を父に持つ元国土庁長官、石井一氏(写真右の左)が、日本人ジャズ演奏家の功績を広く伝えようと、2016年9月1日、一般社団法人日本ジャズ音楽協会を設立した。ジャズを通じて日本文化発展に貢献した「ジャズ・ミュージシャンも褒章の対象にすべき」等の運動を展開し



てゆく。また、サッチモとジョージ・ルイスの世界的コレクターとして知られる、元ポニーキャニオン社長、同日本レコード協会会長の佐藤修さん(WJF賛助会員=写真下の右)が理事長を務め、日本レコード協会、ユニバーサル、ソニー、ワーナー他各レコード会社、ミュージック・ペンクラブ・ジャパン、日本ジャズ協会21、横浜ジャズ協会 21、日本楽友会が協賛団体に名を連ねている。2016年度は、1979年より日本唯一のジャズ機関誌「ジャズワールド」を発行し、日本ジャズ界に大きな貢献を続けているビブラフォン奏者、内田晃一氏に12月16日文化庁長官賞が贈られた。

“ジャズの王様” ルイ・アームストロングの功績 Vol.1

スイング感と“ジャズ語”を世界に教え後世に伝える

——外山喜雄

スイングしなけりゃ意味がない

最近、音楽を愛好するアマチュアバンドのミュージシャン達がジャズに夢中だ！ 日本中に大学高校のビッグバンド、おじさん世代の社会人バンド、宮城県気仙沼のスウィング・ドルフィンズのような小学生や中学生のジャズバンドも数多い。ジャズがこのように小学生から若者、おじさん達までを虜にする理由、それはジャズという音楽の持つ自由さと、体が揺れてくるようなジャズのスイング感の楽しさではないだろうか！！

ジャズの巨人といわれるデューク・エリントンが1931年、“スイングしなけりゃ意味がない=It Don't Mean A Thing If It Ain't Got That Swing”という名曲を書き、ジャズの本質を見事に言いあてた。今から“80年”も昔の事だ

マイルス曰く“もしルイがいなかったら、私は何もできなかったと思うね”

1900年頃、アメリカ南部の街ニューオーリンズで生まれたジャズは、当年にとって約100歳。初期のラグタイムからデキシーランド・ジャズ、スイング・ジャズ、ビーバップ、モダンジャズ等々と様々にそのスタイルを変化させてきた。そして、いつの時代にもジャズには楽しいスイング・ビートがつきものだった。

このスイング感はどうやって生まれたか。実は、サッチモの愛称で親しまれたトランペッター、ルイ・アームストロングと彼の故郷ニューオーリンズの街が、このスイング感の誕生に深く関わっている！！

マイルス・デビスはルイ・アームストロングについてこう言っているのだ。

『もしルイがいなかったら、私は何もできなかったと思うね。ラップを吹いたら、必ずルイがやった何かが出てくる。そんな具合なのさ』

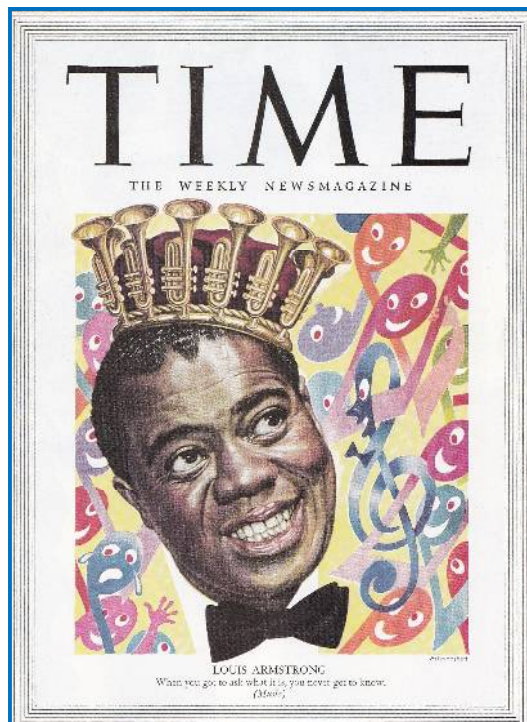
ジャズの表現方法には、一番大切な“スイング感”の他

にも物憂い“ブルーノート”や自由な即興演奏“アドリブ”、楽器をうならせる“グロウル”、音を激しく揺らす“シェイク”等数多くの表現がある。言ってみれば“ジャズのABC”、“ジャズ語”だ。ジャズ創世期だった1920年代に、この“ジャズ語”を作った人こそ、何を隠そう今日紹介するジャズの王様ルイ・アームストロングなのだ。

世界にジャズでスイング することを教えた男

若いプレイヤー達に憧れのジャズマンを尋ねると、マイルス、コルトレーン、パーカー、ロリンズ、ベイシー、エリントン…。でも、チョット待って下さい、皆さん！ 誰か一番大事な人を忘れていませんか！！

ルイ・アームストロングは、1901年ジャズの故郷ニューオーリンズのスラムに生まれ、ニューオーリンズの黒人スラムの音楽に囲まれ育った。1900年頃、この街でジャズを



タイム誌の表紙になったサッチモ(1949年2月21日)

芽吹かせたパイオニア達のスイング感やジャズ感覚を、世界に通用する“完成品”に造りあげ、1920年代シカゴやニューヨークに出て脚光を浴びた。ニューオーリンズ仕込みのサッチモの斬新なスイング感がきっかけとなってアメリカのジャズブームが大きく膨らみ“世界中の音楽がスイング”し始める。世界の数億の人口がジャズに酔うのだからスゴイ。影響はポピュラー音楽からクラシックの分野にまでおよび、音楽のみならず“ジャズエイジの到来”と形容されるように、ジャズは社会のあり方にまで大きく影響し社会のスタイルまでも変えていったとも言われている。

黒人差別が過酷だったあの時代に、南部の田舎町のスラム出身の黒人がスラムの音楽で世界を変えた。初期の

ジャズの歴史は、とてつもないロマンに溢れている！

ストレート・メロディーを楽しくスイングして吹く、これが出来たらジャズは100倍楽しくなる！！

ルイが登場して世界中がスイングした頃、ジャズはだれでもが楽しめる音楽だった。1940年代以降ビーバップやモダンジャズの登場で、ジャズはある意味で進歩したが、難解で技巧的になった。誰もが楽しめる“スイング感”よりも、プレイヤーの能力や技巧、過度に“芸術”を意識する姿勢が強くなり、一般の人々の支持を失ってしまったのはちょっと残念なことだ。

僕は昔から、古き良き“黄金時代ジャズ”を迫りかけてきた。早稲田大学ニューオーリンズ・ジャズクラブでジャズを研究し、サッチモが1964年に来日したときは楽屋に忍びこみラッパを吹かせてもらった！！ サッチモとジャズの故郷に憧れ、卒業後就職した会社をやめて1968年移民船ブラジル丸に乗りジャズの故郷ニューオーリンズへ。クラブの仲間だった家内の外山恵子とともに5年間、ルイ・アームストロングが育った街角で生活、ジャズ武者修行する貴重な体験をした。その頃からの夢がある。数あるスタンダードの名曲がストレート・メロディーを吹くだけで素敵なジャズ演奏になるとしたら、アマチュアジャズバンドの活動も、プロ・ジャズマンの演奏も、ライブのお客さんも、



ルイ・アームストロングに大きな影響を与えた師匠ジョー・キング・オリバーとサッチモ 2番目の奥さん ピアニストのリル・ハーデン

もっともっとジャズを楽しめるのではないだろうか。私達のニューオーリンズでの体験を元に、そんなお手伝いが出来たらと思ってきた。

サッチモはニューオーリンズで音楽家としてスタートを切った若き日、師匠のキング・オリバーやオールドタイマー達からこんな忠告を受けている。

『メロディーを忘れてはいけないよ。メロディーをストレートに吹いてスイングさせられれば、それが一番さ』

難しいフレーズやアップ・テンポのフレーズ、16分音符のスケールばかりがジャズじゃない！！ スイングするリズム、その“スイングのこつ”をつかむことこそ、ジャズを自由に楽しく、気楽にエンジョイする秘訣、そんなことを、ルイ・

アームストロングのジャズから皆さんに感じ取っていただければ幸いだ。

少年院で始めて手にしたコルネット

ルイが初めて楽器を手にしたのは11歳の時だ。ニューオーリンズは、人種のるつぼといわれるほど多様な人種と、その音楽に満ち溢れていた。そんな街で、アフリカの血の濃い黒人達の強烈なリズム感とヨーロッパ等から来た移民達の豊かな音楽と出会ってジャズが誕生したのである。黒人スラムの教会はジャズっぽい手拍子とゴスペルで建物がシェイクするほどスイングしていた。スラム街に溢れるブルース感覚。また、黒人達の間にはジャズ葬式の伝統も育っていた。10人編成くらいのブラスバンドが讃美歌を演奏し墓場まで行進。でも葬式が終わると“もうこの世の苦しみは終わった！ 祝福しよう”とばかり、葬式を“楽しみに”集まった

黒人の群衆と共にジャズに合わせ踊りまくりながら帰って行く。あの有名な“聖者の行進”も、葬式の帰りのジャズで演奏された曲だったのだ。この伝統の葬式を何度も体験した私は、そこにジャズの持つ爆発するようなスイングと歓喜の源がある事を確信した。差別を受けていた黒人達が天に召され解放される。自由の歓び、開放感、天に捧げる歓喜の叫びが込められたジャズの感情表現…そんなジャズの今までにない魅力が世界を虜にし

たと思っている。

そんなニューオーリンズのブラスバンドに憧れ、くっついて歩いていたルイ少年は、貧乏で楽器を買うことなど出来なかった。彼は子供の頃から歌が得意で、4人組のボーカル・カルテットを子ども達で作って繁華街を流して歩き小銭を稼いでいた。1912年、11歳の大晦日、父親のピストルをクラッカー代わりに発砲して逮捕され少年院に。そこで子ども達のブラスバンドに入れてもらい始めてコルネットを手にする。そして彼の才能が大きく花開くのである。

ルイ・アームストロングの発明した“ジャズ語”

少年院を出る頃には、ルイは師匠として尊敬していたキ

ング・オリバーのようなニューオリンズの先輩ジャズマン達のジャズ感覚を吸収し、素晴らしい“ジャズ語”の数々を生みだし才能を開花させ始める。1922年シカゴで人気が出ていた師匠キング・オリバー楽団のセカンド・ホルネット奏者として北部に行き、彼の天才的“スイング感”と“ジャズ感覚”がミュージシャンの間で一大センセーションとなるのである。1924年にはニューヨークの人気バンドだったフレッチャー・ヘンダーソンの10人編成くらいのスモールフルバンドで演奏。ルイの持ってきたスイング感の影響でバンドは一夜で様変わり、ヘンダーソンやメンバーのドン・レッドマンは後年のスイング時代、ベニー・グッドマン楽団の重要アレンジャーとして活躍、シング・シング・シング等の名演の編曲で大きな影響を残した。

1925年シカゴに戻ったルイは、黒人大衆向けのレコードを作っていたOKehレーベルにルイ・アームストロングとホット5、ホット7として多くのレコードを残し、この時代のルイのアイデアが、“ジャズ語”として後のジャズに大きな不滅の影響を与えた。だからマイルスは言うのだ。『ラップを吹いたら、必ずルイがやった何かが出てくる』と。

模倣から始まるジャズ・スタイルの継承

ジャズの歴史たどると、全てのジャズの巨人達がスタイルの模倣からスタートしている事に気づく。アイドルとした憧れのプレイヤーと区別が付かないほど模倣したところからスタートして、後に自分独自のスタイルに到達している。若き日のルイは、師匠のキング・オリバーと1923年に初レコーディングをしているが、全く区別が付かないほど師匠にそっくりである。ルイのそっくりコピーだったロイ・エルドリッジ、そしてロイのそっくりコピーだったディジー・ガレスピー…とサッチモの伝統は受け継がれていく。

もともとジャズはクラシック音楽と全く対照的なところから生まれた。生まれは王侯貴族のサロンではなく黒人ゲットー。育ちはコンサーバトリーや音楽院ではなくスラムの教会のゴスペルやジャズ葬式。演奏場所は王侯貴族の劇場ではなく場末の酒場。演奏中息を殺して聴く必要はない。叫び声、手拍子、踊り出す者、聴衆が参加も自由。そんなジャズの生い立ちが世界を魅了した重要な要素だ。スラムの街角の教会やジャズ葬式の音楽から生まれたジャズは、そんな生い立ちの影響を受け、スラム街の隣人達のおじさん達、おばさん達の歌う歌い方の憧れ、その伝統を継承

しスラム街の文化に同化していく中から生まれ育っている。

ルイのレコードをすり切れるほど聴いてほしい

SPレコード、LPレコードの時代、何度も聞いてソロを覚えたりすることを、レコードがすり切れるまで聞くといったも

のだ。レコード針が盤の上をこするから、何百回もかけると盤がすり切れる。私も、すり切れるまでかけたレコードが何百枚もある。CDの時代も終焉を迎え、今やパソコンの音ファイルやデータになった時代、何度

▲図① ジャズのスウィング感のルーツはラグタイムのシンコペーションにある。しかし同じようなシンコペーションであっても、ジャズではアクセントの取り方や音価（音の長さ）のとらえ方がラグタイムとは全く異なり、その結果“スウィング”するようになる。

聴いてもすり切れなくなってしまう“すり切れるまで聴く”は死語となった！ ジャズのスイング感などのような感覚は、なかなか文章や譜面では表現出来ないところがある。サッチモが確立したジャズのスイング感、ジャズのテクニックの数々を体得して、自由にジャズを演奏するコツを身につけるには“すり切れるほど聴いて覚える”こと。また、そうしたレコードから、自分で“譜面を起こす”、さらにそっくりに吹ける、弾ける、様になることが不可欠だと思う。そうした努力を永年続けていけば、格段に自由なジャズ感覚を皆さんに身につけていただくことが出来ると思う。ルイだけではない、世界を熱狂させた黄金時代のジャズ、その名プレイヤー達を“すり切れるほど”聴いてスタイルを盗もう。それが、皆さんに自由なジャズ感覚を磨いていただくための、私の永年の経験から得た提言だ！！

(次号に続く)

サッチモ讃歌

サッチモには多くの顔があります。……ジャズの王様、エンターテイナー、ハリウッドスター…サッチモの大ヒットハロドリーを聞き見た人はエンターテイナーとしてのサッチモを感じることでしょ。ワンダフルワールドからは“愛の精神の伝導師”でしょうか。でも、偉大なクリエイター、ルイ・アームストロングはもともと、それだけでは収まらないたいへんな顔をも持っているのです。若き日のサッチモは世界のジャズをリードした牽引車、ジャズを創ったその人だったのです。ジャズ界、音楽界その他、偉大なサッチモを賛美する言葉は、限りがありません！！

(外山喜雄)

レナード・バーンスタイン

彼の音楽はリアルで、真実で、正直で、シンプル、そして気高くもあります。彼がトランペットを口に当てるとき、それが三つの音を練習するときでさえ、心の底から音を出すのです。

マイルス・デイビス

もしサッチモがいなかったら、私は何もできなかったと思うね。ラッパを吹いたら、必ずルイがやった何かが出てくる。そんな具合なのさ。

プレイボーイ・マガジン

20世紀で一番偉大なバンドはと聞かれたら、それはルイ・アームストロングのホット5と、引き続き完成度をましたホット7だ。ビートルズは足下にも及ばない。この二つのバンドは、ポピュラー音楽の進路を変えたのです。

ニコラス・ペイトン

スタイルに関係なく、どんなに私達がモダンになっても、彼は私達全員の父です。その影響を避けることは出来ません。1920年代、30年代に彼がやったことで、現在でも出来ないことがいくつもあるのです。

ケン・パーンズ

音楽におけるアームストロングは、物理のアインシュタイン、旅行におけるライト兄弟です。

デューク・エリントン

誰がミスター・ジャズかと聞かれたら、それはルイ・アームストロングだった。彼こそジャズの権化。私は彼をアメリカの典型(アメリカン・スタンダード)、アメリカの独創(アメリカン・オリジナル)と呼びます。

ビング・クロスビー

ルイの精神的な息子とも言えるウイントン・マルサリスは、ポップスはジャズのトーマス・エジソンにたとえ、ルイと同じ世紀に生きていて嬉しい、こう言っています。私も誇り思って、サッチェルマウス尊師のお陰を認めたいと思います。彼はアメリカの音楽の始めと終わりなのです。

レナード・フェザー

アメリカ人は無意識のうちに、日常生活の一部を、サッチモが建てた家で暮らしている。

ルイ・アームストロング

♪「美しい音楽といえばネ、一度ニューオリンズの葬式を見てほしいもんだ。ジャズ葬式で演奏するオンワード・ブラスバンド…。まるでオペラの歌手が心をこめて歌うように、悲しさや美しさを、心から音にこめるのさ。いろいろな評論家がね、私のミュージックのスタイルは何スタイルか、なんて議論をしているけれど、私はいつも、ニューオリンズのスタイルをやっているのさ。トランペットを吹くとき、歌を歌うとき、目をつぶるとニューオリンズの風景や、私の師匠のジョー・キング・オリバーのラッパのフレーズが浮かんでくる……。私は、それをやっているだけなんだ」♪

♪「私は、自分の出来ることをひけらかして自分の才能を証明しようなんて、思ったこともない、ただ、目の前にいる人々の為にグッド・ショーをしたかっただけさ。私の人生はいつも音楽だった。いつも音楽が最初。でも、音楽は一般の人々に理解されなければなんの価値もない。お客さんの為に生きる、それがニューオリンズのオールドタイマー達から私が学んだ事さ。いつもこう言い聞かされたんだ、メロディーを大切にね。“人々に喜んでもらうため”にあなたがいるのさ。」♪

♪「ハロー・ドリー」と唄うやいなや、いつもそこには誰か“イヤッー！”と言う人がいるのさ。昔、ニューオリンズを発った時、オールドタイマー達が、私にこんなはなむけの言葉をくれたのを思い出すよ。“いいかい、あの人々の前にいつも居なきゃダメだよ。大衆をよるこぼせるんだ”。イエス！ 私は彼に大賛成。肝心なのは聴衆のために生きることなんだ。聴衆のために私たちがいるんだから…」♪

♪「私が言いたいのはね、何も人々の所へ行っても、彼らを叩き起こして、“わかる、この音楽は芸術なんですよ”なんて大声で言うような事はしちゃいけないって事なんだ。それはアートに違いないサ。なぜかって、ニューオリンズで始まった私達の音楽を世界が認めてくれたんだから。アートじゃなかったら今頃は死んで消えてしまっているヨ。でもね、アートなんて事について語るのには評論家とか、他の人達に任せておけばいいサ。なぜかって？ 私達がそれを演っていた時は、私達はただあのステージの上で働いているのが楽しかっただけなんだ。」♪

「サッチモ・サマーフェスト2016 シンポジウム・レポート」

——古川 博(京都市、会員)

私は昨年も「サッチモ・サマーフェスト2016」に行きたいと思い、ニューオーリンズに行っても良かった。今回の主たる目的はレセプションとサッチモ・シンポジウムへの参加であった。8月4日夕方、オープニング・コンサートに続き8時からレセプション・パーティーで顔なじみの有名人ばかりで大いに語り、多くの写真を撮り、暖かく迎えられた。

サッチモ・シンポジウムはジャズライブと同じく8月5日～7日の3日間、近くの劇場で開催された。私は3日間で人気の主なセミナーはすべて参加したが、今回はその一つをレポートする。

コグスウェルLAHM館長が「ルイと聖書」語る バチカンでのルイ夫妻とローマ法王接見秘話

ルイ・アームストロング・ハウス・ミュージアム館長、マイケル・コグスウェル氏の Louis and the Good Book「ルイと聖書」のセミナーは8月6日3時半から始まった。

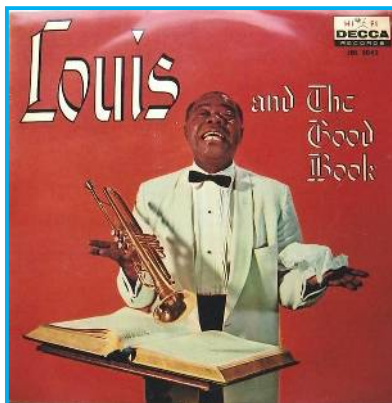


コグスウェル氏(右)と筆者

最初に流れた曲は「誰も知らぬこの悩み」、この曲はデッカ盤 LP「ルイと聖書」(写真右下)の一曲目である。コグスウェル氏は最初にルイはバプティストだと述べた。続いてルイ・アームストロング・ハウスの3階にある「お祈りの場所」の

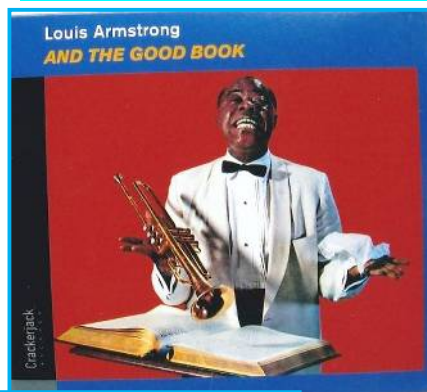
写真を見せた。私はNYサッチモ・ハウスを8回訪問して微かに記憶しているが、いつもガイドは

簡単に過ぎる場所だ。ここは敬虔なクリスチャンであるルシール夫人がお祈りのために使用した場所で小さなキリスト像やマリア像が壁ぎわに多く飾られている。ルシールがお祈りの時、膝をのせていた低い台がある。アームストロングが4度目の結婚したルシールはNY中流の古風で堅実な家庭、安定した生活を身に付けていた。お祈りをするルシール夫人はルイ・アームストロングが必要としていた安定感を与えたと言われている。



続いてコグスウェル氏はアームストロング夫妻のバチカンでの写真を見せた。アームストロング夫妻は1968年2月7日バチカンを訪れ、ローマ法王と接見した。その時の写真を2カット紹介する。(サッチモと法王=写真下の中央、法王とアームストロング夫妻=同下段)

会場に流された「ルイと聖書」、9曲追加の新CD 休憩時間のBGMは名曲「ケンタッキーの我が家」



アームストロングの「ルイと聖書」はサイ・オリヴァー合唱団と共に演奏したLPアルバムでボーカルが多く、学生時代になんとなく買って50年前

の私には難しく、ほとんど聴いていなかった。今回、家の棚からこのLPを発見した。

さて、新しい輸入盤CDで「ルイ・アームストロングと聖書」(写真左上)を紹介したい。これは「ルイと聖書」LP12曲と共に哀愁に満ちた9曲が追加された構成だ。この9曲の中で特筆すべきは「懐かしの南部よ」と「ケンタッキーの我が家」の2曲が素晴らしい。今回は特筆の2曲からBGMとして会場に使用された1曲について

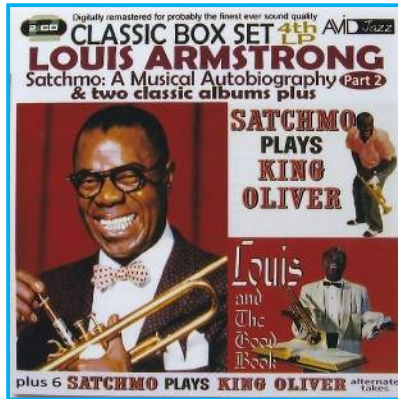
レポートする。

今年のシンポジウムで3日間、各セミナーの休憩時間にBGMとして流れていたのがサッチモの「ケンタッキーの

我が家」である。あまりに耳慣れたフォスターの名曲だが、サッチモの強烈な演奏に飛行中、帰国してもずっと私の頭に残り強烈な印象を受けた。その音源を調べて行くといろいろの発見で大きく関連していることが分かった。

最新のCDにも「ルイと聖書」などが挿入されているサッチモの優れた才能とアイデアが展開の大作！

このサッチモの「ケンタッキーの我が家」は「サッチモ・プレイズ・キング・オリバー」アルバム中の代表曲として入っている。昨年の輸入盤CD「サッチモ・音楽自叙伝と2クラシック・アルバム・プラス」Part2(写真右)に「サッチモ・プレイズ・キング・オリバー」と「ルイと聖書」のアルバムが挿入された、米国アームストロング研究界での組み合わせだ。



「ケンタッキーの我が家」は米国人なら誰でも知っている名曲だが、サッチモはこの曲を完全にジャズにしてオールスターズと共に壮大な演奏で素晴らしいジャズにした。この演奏にはサッチモの優れた才能とアイデアが展開されて聴く人の心を感動させる。

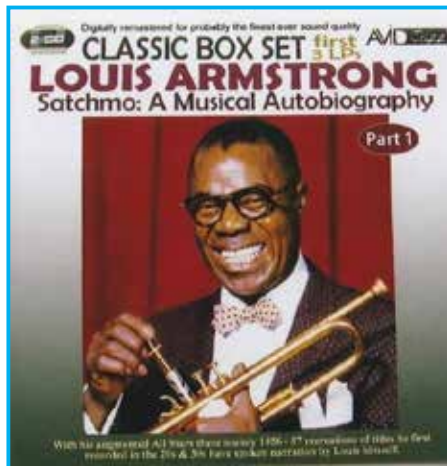
「最初はルイのトランペット〜クラリネット〜ルイ・ボーカル〜ベース&ピアノ〜全員で合唱〜トロンボーン〜ルイ・トランペットの高音」というルイ・アームストロングとオールスターズの実力を惜しみなく発揮した素晴らしい大作になりサッチモ・ジャズを堪能できる。

注目の「サッチモ・プレイズ・キング・オリバー」LAHMがその制作記録16mmフィルム取得

それではなぜルイの「ケンタッキーの我が家」を休憩時間のBGMに使用したかという背景を考えてみる。これにはルイ・アームストロング・ハウス・ミュージアム(LAHM)の存在がある。LAHMの機関誌「ディッパーマウス・ニュース」があり、昨年もシンポジウム会場に「ディッパーマウス・ニュース」2016春号が置かれていたが、その表紙に「サッチモ・プレイズ・キング・オリバー」アルバムの写真が掲載されている。(写真右)ピンクの半袖シャツにカラー・コ

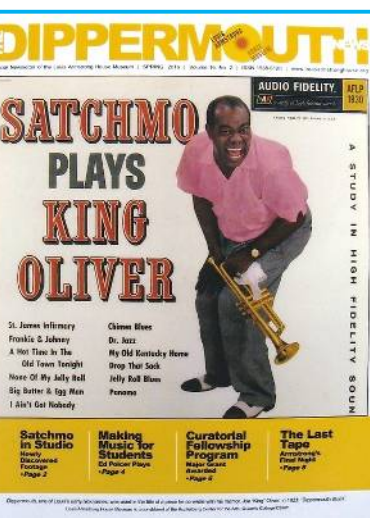
ンビの靴とカジュアルな装いのお洒落なサッチモである。この表紙の背景を調べていくと、サッチモがロサンゼルスでレコーディングした1959年秋、このサンタモニカ・スタジオでのアルバム制作記録16mmフィルムが残されており、LAHMが57年ぶりにこの33分記録フィルムを取得した。この記念アルバムにスポットライトを当てた「サッチモ・プレイズ・キング・オリバー」からは新輸入盤CDの二つにアルバムの代表曲として「ケンタッキーの我が家」を挿入したと考える。

輸入盤CD「サッチモ音楽自叙伝」Part1(写真下中央)のブックレットにLAHMのルイ・アームストロング研究家リッキー・リカルディー氏が書いていることも付記しておく。彼はLAHMの「ディッパーマウス・ニュース」の編集長でもある。ルイは1959年6月イタリアで心臓発作入院した後、回復して気候の良いサンタモニカ・スタジオで「サッチモ・プレイズ・キング・オリバー」をレコーディング、その後の大活躍を続けるきっかけとなったことは、サッチモ・ファンとして今年ニューオリンズのBGMとして流れた「ケンタッキーの我が家」に感謝したい。



ルイは晩年健康上の理由でトランペットを封印してボーカルだけの活動となり、1970年ニューポートでもボーカルだけの映像がある。今年のシンポジウムの最終日の最

後のセミナーでサッチモがオールスターズを再結成してトランペットを吹き「南部の夕暮れ」を演奏した最後のトランペット映像、1971年2月23日が初めて披露されて大変驚き、感動した。



サッチモは最後に大好きなトランペットを吹きたかったのだと思う。この5ヶ月後にルイ・アームストロングは天国に旅立った。

**ご寄付と嬉しいお手紙
ありがとうございます**

- ◆荻原和幸様 (会員、世田谷区) クラリネット + 2万円
- ◆井上和弘様 (大阪市) 3万円

岡崎市の「ドクター・ジャズ」、内田修さん逝去

前号の会報91号で愛知・岡崎市の職員、三浦健仁さんからの寄稿でご紹介いただいたばかりの外科医でジャズ愛好家「ドクター・ジャズ」とし



て知られる内田修さん(写真上)が去る12月11日、肺炎のため亡くなった。享年87歳。

また、JaZZ JAPAN vol. 76(平成28年11月発行)の表紙(写真右上)を飾り、「ジャズを愛しジャズに愛された男」として岡崎市内の「内田修ジャズコレクション」ともども同誌の巻頭をグラビアで飾ったばかりでもあった。



佐藤修さんから今年のお正月、外山夫妻に届けられた「サッチモ年賀状」→

紀尾井ホールでの第2回ジャズコンサートはビッグバンド・ジャズがテーマ。最初のサウンドが放たれた瞬間、全身の音楽細胞ひとつひとつがヨロコビに打ち震えました。心地よい熱めのシャワーを浴びた気分です。MCとボーカル以外、ステージの演奏は全てナマ音。素晴らしい音響効果のホールです。▼ステージの背後には1920〜40年代の映像、外山さんと瀬川先生のアカデミックな解説はわかりやすく、演奏をバックにプロダンサーが踊るチャールストンとスイングダンスは「ビッグバンド・ジャズはダンスホールで開花した」との解説が実感できるシーンでした。▼カーネギーホールでのベニー・グッドマン演奏の譜面でのライブ演奏は、グッドマンへのリスペクトと相俟って至福のひとつとき▼観客の7割はクラシックファンとのこと、ジャズアレンジで演奏された「くるみ割り人形」はよく知っているけれど「キヤラバン」という曲は初めて聴きました、という方もいらつやいました。けれど、みなさん手拍子や声を出して唄うなど、とても楽しそうでした。次回のコンサートが楽しみです。(山)

鈴木孝二さんとジャズの足跡



デキシーセッションのクラリネット奏者として長年、活躍されていた鈴木孝二さん(写真左上)が、こ

のほど駒草出版から発行された『証言で綴る日本のジャズ2』(小川隆夫著)の中で、筆者とのインタビューに答えて、19ページにも渡って孝二さんが歩んできた道、著名ミュージシャンとの交流、エピソードなどを語っている。とても素敵な裏話、秘話もいっぱいのお勧め本。(税込み5616円)

募集中

♪ジャズを愛する皆様
どうか会員になって下さい!!
また皆様のお知り合いの方々に
ぜひ、WJFへのご入会をお勧め下さい

＝WJF年会費＝

- 一般会員(General Membership) ¥6,000
- 学生会員(Student Membership) ¥3,000
- 賛助会員(Friends of Louis Armstrong) ¥12,000

■会費のお振込み先■

郵便振替 00110-4-415986

ワンダフルワールド・J・F

銀行振込 三菱東京UFJ銀行浦安駅前支店

普通:5175119“ワンダフルワールド”

お問い合わせは: WJF事務局

TEL: 047-351-4464

Fax : 047-355-1004

Email:saints@js9.so-net.ne.jp

日本ルイ・アームストロング協会HP

検索エンジン:Yahoo,Googleで

<検索>ルイ・アームストロング

<http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf>

編集長から